

半 丈 記

永井 規男*

京都は東山の清水寺の山門の、建築の構成用材にたいへん多種の樹木が使われているというが、それにはどんな理由があるのかと新聞社が電話で尋ねてきた。そういわれても答えようがないが、この山門は清水寺では最も古い建物で室町時代ということになっている。東山自体が樹種の豊かな山だから、地元の木を使ったからではとか、庶民信仰の寺だからいろんな信者がいろんな木を寄進したからではとか、思いつきの御託を並べておいたが、記録がないので真相はわかりようもない。ただ昔の人は現代が常識にしているような木の使い方はしていない。あまり樹種にこだわらず材木そのものを見ていた節がある。昨年、姫路の書写山の鐘樓の修理を拝見したとき、柱に使われている杉材の木目がたいへん細かくて、五百年以上経ているのにほとんど風蝕がないのに一驚いや大驚した。柱には檜か樺というのが相場であるが、木目次第では杉のほうが勝る場合だってあるわけで、これなどその好例である。確かに檜は良質の材木であるが、昔の人はいまのように檜一辺倒であったわけではない。銘柄でなく木そのものを見ている。銘木といえば、古来「シタン、コクタン、タガヤサン」がよく知られているが、これらは誰がみても美しい良材であろう。シタン、コクタンは紫檀、黒檀だが、タガヤサンは鉄刀木と書く。もっとも最近までわたしも知らなんだが。おまけにみな樹木なのだと思っていたが、実はぜんぶマメ科なのだろう。ジャックと豆の木のように高木になる豆の木が熱帯にはあるわけだ。

今は材木の世界も銘柄だけの世界である。檜といえば目のあらいブヨブヨの材でも重宝される。癖のある節の多い木は見た目も悪いとて嫌われ、木の質は二の次で、節なしの木目の通った木ばかりが偏愛される。見た目によい外材がドシドシ輸入され、いまや日本は緑が急速に消失する原因加担者になっている。また檜の薄板を貼りつけて檜でございという材木も罷り通っている。材木篇贋作物である。しかし、節も死に節でなければ問題はないので、むしろ節が多い木には柾目だけの材木にはない面白みや趣がある。だから昔の好事家は好んで節あり木を使ったものだ。木のこともよく知っていて多種の材木を見事に使いわけている。没趣味の輩が、節がある木を使った家を安普請といったか、腕に自信のない大工が木の綺麗さで誤魔化そうとしたか、そんなこんなで木目の通った節なし木だけの面白みのない世界になってしまった。木はむしろ節があるのが普通なのだし、そっちの方に面白いものがあるのに、とおもってしまう。材木にも粹なものと無粋なものがある。粹という概念が窒息しかかっている現今では材木のことで気がまわらないのだろうか。ところでひょっとすると、清水寺の山門をくぐった善男善女は、そこにいろいろな種類の材木が使われているのを見て、その材名の当てっこをしたか、その木がどこにどのように使われるのかを見て、ウン成る程に思ったりして愉しんだのかもしれない。いわば大工の謎かけと、参詣人の謎解きの世界がこんなかたちで展開した粹な世界があったと想像するもの一興なのでは。

* 工学部教授 工博（建築学科）